

日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察 — 仏殿軒下の邪鬼像を中心にして —

宮 田 充

目 次

序論	仏教彫刻における鬼神像の源流と伝来
第一章	仏教彫刻の起源と流れ
第二章	インド・中国・朝鮮の仏教彫刻における鬼神像
第三章	「支える」鬼神像の日本への伝来
本論	仏塔や仏殿の屋根の軒下を支える力士・邪鬼像
第一章	その現状と像容・意匠の特徴
第二章	唐招提寺金堂の「隅鬼」
(1)	その名称と像容
(2)	唐招提寺金堂の創建
(3)	如宝について
(4)	「隅鬼」について
第三章	まとめ

結びにかえて

序論 仏教彫刻における鬼神像の源流と伝来

第一章 仏教彫刻の起源と流れ

仏教は日本の古代文化において大きな基盤の一つといえるだろう。そして、彫刻・絵画で現された仏像や涅槃図などは、その重要な要

日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察

素の一つである。紀元前五世紀の古代インドで始まった釈迦の教えは、その弟子達や綿々と受け継いだ信仰者達による仏典結集などで形成され、古代インドの神々さえもその懐に取り入れて創造され一大教義となつて構築されていった。そして南伝・北伝という大きな枝分かれも含め、教義の変遷とともに仏伝に関する浮彫や彫塑などが制作され、紀元前後の頃にガンダーラやマトゥラーなどで初めて釈迦（仏陀）の像、つまり仏像が制作された。中国には紀元後一世紀に伝えられたとされるが、中国社会に根をおろし発展をみるのは、仏図澄・鳩摩羅什や法顕らの活動がみられる四世紀以降といえる。中国南北朝時代には、北魏などの国家的保護政策もあり、各地に石窟寺院が営まれ、多くの壁画や浮彫・彫塑などの仏像（広義には如来・菩薩・明王・天像等を含む）が描かれ刻まれることになる。中国で漢訳された經典は、その後仏像などの偶像とともに朝鮮、さらに日本へともたらされる。

二十一世紀の現代にいたるまで、それぞれの国での仏教を取り巻く状況は様々な変遷をみるが、伝えられた仏像に関していえば、日

本におけるそれら仏教遺産はインド・中国を凌ぐとさえいえるのではないかと考える。日本の仏教文化財は木造主体の建築・彫塑の類が多く、地震による火災や台風、さらに戦火や廃仏毀釈などの社会事象により失われてしまったものも多い。しかし、それらの災禍を逃れ、人から人へと大切に受け継がれた遺産は、誇りうる先人達の心なのだと考える。

本稿はそのような仏教遺産のひとつである仏教美術の中で、仏殿・仏像を「支える鬼神（力士・邪鬼等）像」に関してその変遷を探りつつ、特に仏殿（仏塔）の軒下を支える力士・邪鬼像について、日本に現存する像を対象に検討を加えたい。

第二章 インド・中国・朝鮮の仏教彫刻における鬼神像

仏教彫刻における鬼神像の源流は、パールフトやサンチーなどの仏教遺跡の欄楯にみられる。図版1がインドのカルカッタ博物館に収蔵されているもので、その碑文には「クヴェーラ・ヤクシャ」と刻まれている（前二世紀）。インド神話に出てくる「クヴェーラ」という財神は「ヤクシャ」と呼ばれる従者を率いており、神話の中



図版 1

では人間に害をなす悪鬼の類でもあったが、仏教に取り込まれてからは仏法を守る護法神となった。これが四天王のうちの多聞天のルーツとされる。その像容をみると武将形ではなく、またその表情に忿怒の様はない。佐和隆研編『仏像図典』によると、四天王像は「もともと仏教本来の神ではなく、その表現にもとくに規制がなかった」ので、「インドに於いては貴人の姿に表現」され、中央アジアから中国に至る間に「次第に武人像として完成」、さらに日本において「忿怒著しい武装天部形」となったとある。たしかに、その像の造形は日本のものと大きく違っている。ただ足下の従者像は、蹲踞して肩部でクヴェーラを支え、両腕を前方で組み、またその表情に関して視線は前方下をみつめ思索的な様子が見て取れる。

ヤクシャ像はまた仏塔の周囲に建てられた門柱にも現されているが、サンチー第一塔の西門柱の梁を頭と手で支える短軀（侏儒）・太鼓腹の像（図版2）がそれである。この塔門は前一世紀後半頃のものとされ、仏殿等の建造物を支える像の源流といえるだろう。この侏儒形で下支えのヤクシャ像は、ガンダーラではギリシヤ的容貌をもち、ギリシヤ神話のアトラスとして表現されている（図版3）。古代インドにおいて、従者としてのヤクシャは尊像や仏閣の一部を



図版 2



図版 3

「支えるもの」として表現されている。金岡秀友氏は「外教たると外教たるを問わず、古代インドにおいて、

鬼は人間や神と絶縁した存在ではない。その両者と連携し、相互に影響を与えあい、時としてその何れにも変容する。神が鬼の形をとり、鬼が人の形をとる。」としているが、このことはその後の伝播地においても、内包された本質として受け継がれていったものと考えらる。

中国における仏教美術の遺産としては、各地で営まれた石窟寺院の壁画や浮彫・彫塑があげられ、四世紀以降、敦煌莫高窟・雲崗・龍門・炳靈寺石窟などに残された。そこにも仏殿・仏座を「支える」像が多数表出している。

壁画や浮彫などに現されたこれらの像は、「夜叉」・「藥叉」



図版 4

(*Yakṣa* = ヤクシャ)とされ、前述のクウェーラを支える従者や塔門を支える侏儒の変形で、中国西域においては力強い容貌に大きく変化している。また羣衆石窟寺には浮彫の仏台座等を支える像(図版4)が刻まれている

日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察

るが、「力士」「邪鬼」「怪物」「神王」「地神」「托山力士」など様々な名称がついている。その支え方は、おおむね両足を開き蹲踞し両手を開いて(又は片手で)支える姿で現されている。表情は一部を除き、穏やかなものが多く、ほとんど苦しみの様はみられない。雲



図版 5

崗石窟にも仏座や仏龕のアーチ状の柱を支える像が多く見られるが、特徴的なのは第9窟前室天井に高浮彫で現された侏儒(アトラス像(図版5))であろう。前述したガンゲーラでのヤクシャ像はギリシャ神話のアトラスとして示され、多くは仏座を支える者として現されているが、ここでは本来のアトラスの役割である天空を支えるような像として表現されており、このことはとても興味深い。龍門石窟には、仏座ばかりでなく香爐を複数の力士が支えており、仏具にも同様な役割を担う表現がみられる。

朝鮮における「支える像」としては、高句麗時代の古墳にみられ、安岳3号墳(四世紀後半築造)の前室と奥室の境にある石柱3本の柱頭に怪獣(邪鬼)(図版



図版 6

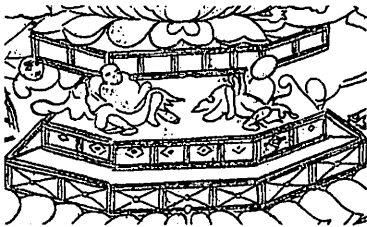
6)が描かれ、長川1号墳〔五世紀中葉〕の前室の天井の隅に作り出された三角形の部分に、足を踏ん張り上の天井持ち送りを両手で支える力士像が描かれている。このように、中国・朝鮮の仏教美術において、ヤクシャの担っていた「支える」役割は様々な姿で表現され、時には天王像に踏まれる「邪鬼像」として、また仏座を支える「神王」として、また天井を支えるアトラスになぞらえた姿で表出している。そのルーツである、クヴェーラの従者（眷属）としてのヤクシャは、それぞれの時代や伝えられた土地で、制作者の様々な思いに添えているようである。

第三章 「支える」鬼神像の日本への伝来

仏教美術における鬼神像について、図像を含めて日本への最初の伝来は不明であるが、ここではその伝来に関わる例をふたつ考察し



図版 7



図版 8

たい。

図版7は七世紀後半に描かれた法隆寺金堂壁画九号壁（弥勒浄土図）といわれているが、異説もある）の描き起こし図で、図版8はその台座部分の拡大図である。そこには、前章でみてきた台座を支える「力士」か「邪鬼」的な像が描かれている。この図様の伝来を考えるにあたり、示唆を与えてくれたのは梶谷亮治氏の説である。梶谷氏は白鳳期に日本で描かれた法隆寺金堂壁画六号壁（阿弥陀浄土図）と唐からの請来品とされている勧修寺繡帳（釈迦如来説法図 奈良国立博物館蔵）の相似性を指摘し、また敦煌332窟東壁南側壁画の阿弥陀三尊五十菩薩図との関連にも言及している。その中でキーパーソンになっているのが黄文本實という七世紀後半頃の官吏である。その名は「薬師寺仏足石銘文」に残されており、その内容から、本實が渡唐した際、王玄策（唐の官吏）によってインドからもたらされた仏足石図を転写し持ち帰ったことが知られている。梶谷氏は、本實は六五三年に入唐した道昭（日本における法相宗の開祖）とともに赴いたのであるうとしている。そして、道昭は玄奘に師事していたのだから、同時期に長安の西明寺にいた道宣（中国南山律の開祖）と近傍であったのではないかとし、阿弥陀三尊五十菩薩図についての知識が道宣周辺から本實にらにもたらされた可能性を指摘している。^③

推古朝の六〇四年に画師に任ぜられた黄書（黄文）家に生まれた黄文本實は、玄奘や王玄策が請来して早々のインド・西域の仏教美術にいち早く接し、飛鳥文化後期（白鳳期）の様式に大きな貢献を



図版 9

果たしたはずである。そして、道昭の指示のあるなしに関わらず、多くの仏画を書写したはずである。帰国に際し彼が請来した中に、法隆寺金堂壁画六号壁阿弥陀浄土図ばかりでなく、九号壁画（支える邪鬼像を含む図像）に繋がる図像があったのではないだろうか。

図版9は白鳳期作とされる當麻寺四天王像（持国天）とその足下の邪鬼像である。先行研究の多くは現存最古の法隆寺金堂像と次第に忿怒形を強める天平期の唐風様式の過渡的なものと位置づけ、その鬚のある点に関しては、新羅からの来歴も指摘されている^④。しかしその西域的風貌や人間的表情、そして邪鬼像の哲学的ともいえる思索的視線などを鑑みると、他に類する像がみられず、かといって当時の仏師の独創的な意匠とも考えにくい。（四天王邪鬼像のうち持国天邪鬼と増長天邪鬼像が思索的表情をしているが、この二つの邪鬼像はともに後補である。平安初期頃のものとして推定されているが、平安初期の邪鬼はほぼ例外なく懲罰の役割をもち忿怒形となった四天王に踏まれ、もがき苦しむ姿である。にもかかわらず、何故このような思索的・哲学的表情をもつかということを考えれば、やはり、元の像がそうであったので、忠実に再現しようとして補作されたのであろうと思う。二体が同

意匠の像ということも、このことの裏付けと言えるのではないだろうか。そこで、序論第二章で触れた【クヴェーラ・ヤクシャ】の足下の像（図版1）と、二体の邪鬼像の身体の屈ませ方や、前方下方を思索的に見つめる表情がとても似ていることとの関連を考えてみたい。この章で初唐期に入唐した黄文本實という人物を、七世紀後半（白鳳期）の仏教美術界のキーパーソンとして挙げた。【クヴェーラ・ヤクシャ】の足下の像に近い四天王邪鬼像は、中国石窟には見あたらない。玄奘や王玄策らがインドから直接持ち帰った仏画か彫刻に、【クヴェーラ・ヤクシャ】と同じ意匠の四天王像及び邪鬼像があり、それを黄文本實のように当時入唐していた人物が、その像容を書写するなどして持ち帰ったのではないだろうか。小林市太郎氏は、当時の状況について、「玄奘や王玄策の携歸した印度の諸佛像及び粉本が、唐において直ちに模されて」とし、また義浄の『大唐西域求法高僧傳』を引用して「當時においては、入竺の諸僧及びその模本などを多く携歸することが一の流行をなした」と説明している^⑥。四天王像の像容が西域的であることから、書写の元の像はガンダーラとの関連があるかもしれない。前述した法隆寺金堂九号壁画に現れた脇侍（図版10）を



図版10



図版11

四天王と捉える説もあり、その像容には豊かな鬚が示されている。また、當麻寺像は四体とも他寺の像に比べて襟の高い胸甲（図版11）を身につけているが、この点も共通項といえる。どちらにしても、法隆寺金堂像は、六世紀までに請来された古様で、そして當麻寺像はエポック的に現れた新像様だったが、次の天平期には四天王の役割が変化し、次第に忿怒を強め、大きな動きを示すことが必要になったのだろう。邪鬼像については、法隆寺金堂像・當麻寺像までは「従者」的意味合いが色濃く残っているものと考えられる。

本論 仏塔や仏殿の屋根の軒下を支える力士・邪鬼像

第一章 その現状と像容・意匠の特徴

濱島正士著『日本仏塔集成』（中央公論美術出版 二〇〇一年）によると三重塔・五重塔・多宝塔など木造仏塔は全国に約二七〇基が現存し、そのうち近世以前に建造されたものが約二二〇基である。本稿で研究対象にした【軒下を支える力士・邪鬼像】を伴う仏塔は、

井関正敬氏の調査によると昭和期まで含めると二十一基だが、近世以前の塔に限ると十九基現存する。さらに、仏殿等まで範囲を広げると現在まで確認できたものは九棟で、本稿では近世以前の仏塔十九基・仏殿九棟、合計二十八棟の軒下の像を対象としてみたい。二十八棟のうち基本的に屋根下の隅木を尾垂木に乗って（座って）手や頭・肩等で支える像は二十六棟である。（残りの二棟は、専修寺唐門像は門の表裏の梁を二体ずつで支え、久米寺本堂像は堂正面の梁を六体で支えている。）尾垂木に乗り隅木を支える像は、構造的にいうと「束」の役割を果たすもので、短い長方柱である「束」に彫刻されたものといえる。

現存最古と考えられる像は、唐招提寺金堂像（南西像を除く三体）で、八世紀後半の作と推定されているがそれに次ぐものとしては、滝山寺三門像（文永四・一二六七年）、次いで法道寺多宝塔像（正平二三・一三六八年）となり、その間の51600年間を埋める像がない。井関氏は塔のみを対象に、「南北朝以前の塔に天邪鬼はない」と指摘しているが、屋根下四隅の構造部材である「束」に彫刻を施すことは、唐招提寺金堂像の例があるのだから、天平末以降の時代で、突如として鎌倉期の滝山寺三門や岩船寺三重塔に現れたり、南北朝期の法道寺多宝塔に現れたと考えるよりは、九世紀後半に創建された東寺五重塔など著名な寺院建築にその例があったのではないかと考える。

表No.1～4及び写真資料にその像容等を一覧にしたが、二十八例

を比較・検討すると、その像容・形態・意匠は非常に個性的で、共通する像容としては、東寺像と仁和寺像及び千光寺像と蓮光寺像の一部に認識できる程度である。また力士像として捉えうるもの、邪鬼像として捉えうるもの、どちらとも判断しにくいものなど様々である。時代は違うが、序論第二章でみたように中国での「支える像」の像容も多様であり、崇拜の対象となる仏像と違って、彫刻師の自由な発想・イメージが具現化したものと考えられる。表で示した像容を見てもわかる通り、邪鬼的・力士的というばかりでなく、力強いもの「東寺・仁和寺・道成寺像など」・飄々としたもの「穴太寺・千光寺像」・弱音を吐きそうなもの「龍原寺像」・笑みさえ浮かべているもの「善峯寺・興願寺・久米寺像」・コミカルなもの「名草神社・柏原八幡神社・滝山寺像」など多様な意匠をもつて造られている。ただ、古いものについては、装飾的要素以上の意味合いがあるのではないかと考えるので、次章でそれを検討したい。

第二章 唐招提寺金堂の「隅鬼」

(1) その名称と像容

本稿ではこれまで仏殿・仏塔の軒下の像を「邪鬼」「力士」と記してきたが、表No.1に示した岩船寺三重塔の旧像は「隅木受飾束」とされ重文に指定されている。また昭和四十五（一九七〇）年に出された『法道寺食堂・多宝塔修理工事報告書』では、この像を「下重隅木支承の力士」とし、次のような記述がある。

日本の仏教彫刻における鬼神像に関する一考察



図版12



図版13

下層軒廻・斗拱は和様出組、軒天井、支輪を備え、隅だけ尾杵を納め上ばに力士を置いて隅木を支承し、軒は二軒繁極、切裏申を付ける。

前章で記したように唐招提寺金堂四隅のうちの三体は、金堂創建時（八世紀後半～末期頃）と推定されており、この像は展覧会等では『隅鬼』と明示されている。

その像容は、元禄期に補作された南西像一体を除き、同意匠というよりはほぼ同形・同表情である。各方向に正対し頭頂部より少し後方の頭部と両肩で隅木を支え、尾垂木上に正座して両手は腿に当て隆々たる二の腕を持っている。その表情は強く大きな目で前方を注視し、歯をこれ以上できないほどに食い縛っている（図版12／北

西)。これに対し、南西像(図版13)は、正対・正座・支え方等は同じだが、その表情は弱々しく情けなげな印象を受け、二の腕は太いが筋力を強調するものとはなっていない。他の現存する像が、初めて造られたものに必ずしも似ているとは限らないことをこの像は示していると思われる。つまり、仏塔修理等の際に傷んだ像に代えて新たに造った場合や火災等で焼失し新造した場合などにおいて、その時々彫刻師が古像の像容にとられることなく、独創的な発想をもって制作されたものも多かったと考えられる。

(2) 唐招提寺金堂の創建

「隅鬼」が創建当初のものであるとして、その建立に関して調査した。唐招提寺はいままでもなく渡来僧鑑真が創建した寺院である。ただ、鑑真在世中には講堂など一部の建物しかなく、寺院というより僧侶の仏門研鑽のための施設であった。そこでまず、いくつかの堂宇について記す。

- ① 講堂…平城宮の東朝集殿を天平宝字四(七六〇)年頃に当地に移築した奈良時代宮廷建築唯一の遺構。現在講堂に安置されている木造持国天、増長天立像は、甲(よろい)の文様の彫り口などに盛唐後半期(八世紀半ば)の石彫との類似が指摘され、特に増長天像は鑑真とともに来朝した仏工の作と推定されている。^{①)}

鑑真の渡来に関しては、弟子の思託による『鑑真伝』をもとに淡

海三船が著した『唐大和上東征伝』^{②)}に詳しい。授戒できる高僧の渡来を依頼するため入唐した栄叡・普照の要請を受けた鑑真の渡航は、五度の失敗と十年を越える歳月をかけてようやく実現したが、その内の第二回目の渡航準備に次のような記述がある。

芥脂紅緑米一百石、甜鼓三千石(略)寶像一鋪、金泥像一軀(略)青錢十千貫、正爐錢十千貫(略)僧祥彦・道興・徳清・栄叡・普照・思託等十七人、玉作人・画師・雕檀・刻鏤・鍔写・繡師・修文・鐫碑等工手都百八十五人、同駕一隻舟

このように、持参する食料・仏像・現金などとともに随行メンバーが記され、その中に雕檀(ちようだん)彫り彫師・刻鏤(こくろう)彫刻師といった工人も率いている。六度目の渡航成功時(天平勝宝五(七五三)年)の人員規模は小さかったが、同様に画師や彫刻師など各種工人を率いていたことは間違いないであろう。この点に関しては、金堂創建についての部分でも触れる。

- ② 金堂…奈良時代建立の寺院金堂としては現存唯一のものである。金堂の部材には西暦七八一年に伐採されたヒノキ材が使用されており、建造は同年以降ということになる。『招提寺建立縁起』(『諸寺縁起集』所収)によると、鑑真の死後に和上と共に渡来した弟子の如宝によつて造営された。この他、経楼・鐘楼なども如宝による造立かとされている。^{③)}

③ 五重塔…東塔があつたが、『日本紀略』によれば、弘仁元(八一

○年の創建^④）享和二（一八〇二）年に落雷で焼失した。
西塔については不明。

（3）如宝について

金堂をはじめとして唐招提寺の伽藍整備に大きな役割を果たした如宝という人物は、『唐大和上東征伝』には六度目の渡航者のひとりとして初登場している。

相隨弟子揚州白塔寺僧法進、泉州超功寺僧曇靜、台州開元寺僧思託、（略）揚州優婆塞潘仙童、胡國人寶最、如寶、崑崙國人軍法力。

鑑真はこの六度目の渡航に、十四人の弟子僧と三人の尼僧、その他外国人など総勢二十四人を率いて来朝している。如宝は胡國人という記述から西域の出身（ソグド人とも）者だったとされる。（但し、元禄十四（一七〇一）年に義澄が撰修した『招提千歳伝記』卷上之一の第四祖如宝少僧都伝には、「少僧都、諱如宝。朝鮮国人也。不知何氏」とあり、詳細は不明である。）中国出立時は出家者ではなかったようで、来朝後に東大寺戒壇院で受戒している。前述の如宝少僧都伝には『弘仁六（八一五）年正月七日、安然而化。居于扶桑六十余年。齡迨八旬云』とあり、来朝した天平勝宝五（七五三）年にはまだ二十歳に満たない青年だったと推定されている。鑑真の死に際する記事として同書の第二祖法載和尚伝に「太祖臨滅、囑師（法載）及義静・如宝三公、權招提衆務。」とある。法載は第一回目の渡航から

鑑真と行動を共にしており、おそらくその死に際しては最上位の高弟であり、義静も中国揚州興雲寺で師事していた高弟のひとりだった。如宝は受戒して十年足らずで三十歳前後の年若い弟子の一人だったが、おそらくその才や人格を高く評価されていたものと思う。結果、師の死後五十年に及ぶ期間に、唐招提寺の伽藍整備ばかりでなく、仏像制作にも大きな役割を果たしている。如宝の造立とされているのは、前述の様に建築物では金堂・経楼・鐘楼などで、彫刻では金堂安置の薬師・梵天・帝釈天・四天王像が挙げられる。このことについて久野健氏は、「堂と像とが同期の設計により（金堂正面の扉を開くと丁度額縁の中に像を安置したように）出来上がっている」としている。^⑤如宝は金堂建立のため、「金堂一宇、右少僧都唐如宝、率有縁檀主等、建立如件」（『建立縁起』）とあるように資金調達に奔走したが、そればかりではなく金堂の設計や仏像の規模・制作方法・様式など多岐に亘って関わっている。斎藤孝氏は如宝の日本美術史の位置づけとして、「初唐・盛唐様式を基調とする天平芸術から、中唐・晩唐様式を中核に持つ貞観芸術」へ日本の工匠たちを導いた「一種のアート・ディレクター」と評している。^⑦『日本後紀』の卷廿四に如宝の卒伝がみえる。

弘仁六（八一五）年正月己卯 少僧都傳燈大師位如寶卒。大唐人。不知何姓。固持戒律。無有缺犯。至於咒願。天下絶疇。局量宏遠。有大國之風。能堪一代之壇師者也。

十代で師に従って異国に渡り、奈良後期から平安初期にかけての

激動期に、師の教えを実践すべく活動した彼を、「天下絶囀。局量宏遠。有大國之風。」と賛しているが、『本朝高僧傳』卷五十七には「桓武帝與后妃太子、就寶受戒」とあり、『元亨釈書』にも「戒行清白ナリシカハ、當代コレヲ崇敬セリ」と記されている。齊藤氏は『性靈集』中の「為大德如宝奉謝恩賜招提封戸表」を引用し空海との親密な交流も指摘しており、鑑真の後継・唐招提寺造営の中核だったばかりでなく、平安初期における仏教界及び芸術界の先導者として、最も重要な人物の一人だったと思われる。

(4)「隅鬼」について

金堂創建時(八世紀末)に設置されていたと推定される「隅鬼」は、どのような意図をもって、堂の四隅の尾垂木に座り隅木を頭で支える像として配置されたのであろうか。鑑真は在唐時より戒律を広めるために弟子達を率いて各地に旅したが、『唐大和上東征伝』の天寶九(七五〇)年の一節に次のような記述がある。

從此七日至潤州江寧縣入瓦官寺登寶閣閣高二十丈是梁武帝之所建也至今三百餘歲微有傾損、昔一夜暴風急吹、明旦人看閣下四隅有四神跡長三尺入地三寸、今造四神王像扶持閣四角、其神跡今尚存焉。

これによると瓦官寺宝閣は、三百年の歳月を経て僅かに傾いていたが、その四隅には長さ三尺、深さ三寸の巨大な足跡が残っており、それに関する逸話として、足跡は暴風の吹いた翌朝に出来ていたも

ので、寶閣を暴風から守るため支えた四神の残した足跡と伝えられていた。鑑真一行が立ち寄った時には四神王の像が造られ閣の四隅を扶持している、という様子が記されている。足跡は地面に残されたものであろうが、この記事だけでは四隅に造られた四神王の像がどの位置にあったか不明である。

『唐大和上東征伝』に出てくるもう一つの記事として、次のようなものもある。これは、天寶七(七四八)年の五回目の渡航の試みの記事である。(結果は海南島に漂着し失敗。)

去岸漸遠風急波峻、水黑如墨沸浪一透如上高山、怒濤再至似入深谷、人皆荒醉但唱觀音、舟人告曰舟今欲沒有何所惜、即牽棧香籠欲拋、空中有聲言莫拋、即止中夜時舟人言莫怖有四神王著甲把杖二在舟頭二在檣軸邊、衆人聞之心裏稍安。

ここにも暴風に対する守護神として「四神王」が記されている。「四神王」という語句がみえる経典としては、陀羅尼集經など三經あるがいずれも暴風との関連はみられない。

これらに記された「四神王」が、「隅鬼」のモデルとなった可能性は十分あるのではないだろうか。前述したように渡来した鑑真一行には「彫檀・刻鏤」と記された彫刻師が同行してきたはずで、「隅鬼」の制作者は、これらの工匠、あるいは彼らの指導を受けた日本の工人だったのであろう。金堂本尊の盧舍那仏蓮花座の内部に「造漆部造弟麻呂 造物部広足」という墨書があり、また薬師如来像光背の唐草の背面に「右自下七枚 買奴彫之 左自下七枚 乙尊

彫之」という墨書がある。これらの人名は仏像制作や唐草彫刻に従事した工人であろう。^⑩ただそこには、金堂創建全体の「アート・ディレクター」たる如宝の意志が反映していたはずで、瓦官寺寶閣の四神王のイメージがあつたとすれば、「隅鬼」は暴風から金堂を守り扶持する願いを込めた像といえる。さらにいえば、弘仁元（八一〇）年に創建されたとされ、江戸中期の一八〇二年に落雷で焼失した唐招提寺五重塔にも、隅木を支える「四神王」が設けられ、これにならつて九世紀後半に創建された東寺五重塔にも設置されたといふことも考えられる。

このように類推すると「隅鬼」とされていることに疑問の念が浮かぶ。像容を再検討すると、手指は五本あるようで、「鬼神形」の特徴（手足の指は二―三本）にそぐわない。（岩田茂樹氏は、日本における五本指の鬼形の例としてこの像など三例をあげているが、逆にこの像は鬼ではないとの証例ともいえる。）^⑪瓦官寺の話には、「閣の四角を扶持」する「四神」「四神王」とあらわされ、そこには「鬼」的要素はみられない。唐招提寺像の場合、齒を必死に食い縛り大きく目を見開く表情から「鬼」と認知されてしまったのではないだろうか。もしかするとそこには、奈良期や平安期に多くつくられ、苦悶し叫喚する四天王邪鬼像の影響があつたのかもしれない。

第三章 まとめ

ここまで、仏殿・仏塔の軒下を支える邪鬼・力士像についてみて

きたが、各寺院には仏殿・仏塔・仏像に関する史料（古記録や棟札等）はあつても、軒下の像に関するものは皆無に近い。それ故か、先行研究も殆どなく、像容に関する比較検討に終始してしまつた観がある。個人的想像の範疇を超えないまとめたが、唐招提寺創建時に屋根の四隅の隅木を支える束として、堂の倒壊を防ぐ願いをこめた「支承の力士（神王）」^⑫「隅鬼」を設置したことが、このような像の起源となつたのではないだろうか。もちろん、インドにも塔の門柱の梁を支える「ヤクシャ」があり、ガンダーラにも仏座を支える「アトラス」があり、中国や朝鮮にも仏龕・仏座・仏具等を支える「力士」「神王」等がある。それらと同じく、仏の教えに従いその一部の下支えとしての役目、暴風等から仏閣を守り倒壊を防ぐ役目を、彼らは千数百年間果たし続けているのであろう。唐招提寺金堂以降の建造物にも、その役目の採用・不採用の多寡は不明だが、主として畿内中心に広まっていたのではないだろうか。しかし、仏像と違って明確な信仰の対象とはならず、またその意味するところが正しく伝わらずに、次第に仏殿・仏塔の四隅で「邪氣」を払う「邪鬼」としての性格付けをされたり、あるいは装飾的な意味合いに転化したという変遷をたどつたと考える。いずれにしても本来は、仏殿・仏塔の周囲の「邪」なるものに対する見せしめやそれらを寄せ付けない魔除けのためのものではなく、仏にとつての従者（眷属）であり、形象としての尊格を支えるものとしての意味をもつものと考ええる。また、密教においては塔を密教の中心仏である大

日如来の三昧耶形（如来そのもの）とみなしている。そうであれば、如来の台座を支える神王・力士の变化形とみることもできるのではないだろうか。

結びにかえて

本稿をまとめるにあたり、四天王像や軒下の像を求めて、この二年間に百余の寺社を訪れた。軒下の像に関してはその像容の多様さに驚きを感じ、ときには奇妙な像に直面して首をかしげることもあった。四天王邪鬼について、水尾比呂志氏はその著作『邪鬼の性』（淡交新社 一九六七）のなかで、それぞれの邪鬼像の「性」を的確に表現され、また岡本太郎氏は『芸術新潮』に寄稿した「邪鬼」と題した一文のなかで、様々な形相に関し、「その言い知れないカオスに、われわれの存在の矛盾の状況が凝縮している」と表現されている。^⑪両方の邪鬼像ともに、歴史という大きなうねりや混沌の中での、人々の凝縮された思いの姿であることを強く感じている。

この稿をおこすきっかけとなったのは、二〇〇五年春に東京国立博物館で開催された『金堂平成大修理記念 唐招提寺展 国宝 鑑真和上像と盧舎那仏』において、「隅鬼」を間近に見たことであった。高さ三十センチほどの、力強い小さな体軀で巨大な金堂の軒下を支えているという。それも千二百年という時間を。風雨に晒されてきた事を考えると、現存していること自体が奇跡的なことだと感じた。本稿は、その宗教性や思想的背景を詳らかにすることを志

したが、その端緒に留まっているという感はぬぐえず、今後このテーマを追い続けたいと考えている。

註

- ① 高田修『佛像の起源』三六頁 岩波書店 一九六七
- ② 金岡秀友『古代インドにおける邪鬼の一考察』『日本佛教學會年報』第四八號 一四頁 一九八三
- ③ 梶谷亮治『法隆寺金堂壁畫の世界』（『国宝 法隆寺金堂展』所収 四二―四七頁）朝日新聞社 二〇〇八
- ④ 毛利久『日本佛像史研究』一九四頁―一九九頁 法藏館 一九八〇
- ⑤ 水野敬三郎『四天王立像』『大和の古寺』二当麻寺 所収二二頁 岩波書店 二〇〇九
- ⑥ 小林市太郎『法隆寺金堂壁畫の研究』『佛教芸術』三 三六―四一頁 一九四九
- ⑦ 春山武松『法隆寺壁畫』一八七頁 一九四七
- ⑧ 長岡龍作氏は『日本の仏像』（中公新書 二〇〇九）のなかで、四天王像の役割の変化を、人々の持戒に対する「観察者」から「懲罰者」への変化と捉えている。
- ⑨ 井関正敬『仏塔における天邪鬼について』『史迹と美術』六四―三六―四三頁 一九九四
- ⑩ 唐招提寺金堂大修理の報告書作成担当の方の話より。
- ⑪ 『国宝 鑑真和上展』（奈良国立博物館監修 二〇〇九） 二二三頁―二四頁 鈴木喜博氏の解説に「肥満する体軀と、克明かつ執拗に彫刻された甲冑の意匠に特色があり、増長天は（中略）鑑真渡来時に同行した仏工の作とみる見解が有力」とある。
- ⑫ 以後の『鑑真和上東征伝』に関する記事は、『過海大師東征傳』（出版者：北川智海 大日本國 建初律唐招提寺藏版 一八九八）と

「唐大和上東征伝」(中條道昭訳「大乘仏典」)「聖德太子・鑑真」高崎直道編所収 一九九〇)を引用・参照した。

⑬ 齊藤孝「唐招提寺と如宝」『人文論究』第一六卷四号一〇二頁 一九六六

⑭ 「日本紀略」前編十四

弘仁元年夏四月 甲申。遣散位外從五位下江沼臣小並等造招提寺塔。

⑮ 「招提千歳伝記」一七頁 昭和女子大学近代文化研究所 二〇〇四

⑯ 久野健「唐招提寺と安如宝」『古代史論叢』中卷六二頁 東京国立文化財研究所 一九七八

⑰ 齊藤前掲書 一〇五―一〇九頁

⑱ 齊藤前掲書 一〇〇―一〇一頁 朝廷から封戸を賜ったことに対するお礼の文を空海が起草した一文で、齊藤氏は、文中の「如宝随師。遠投聖朝。六十年于今矣。」とあることから、如宝の晩年のこととしている。

⑲ 久野前掲書 六二四―六二五頁

⑳ 岩田茂樹「法隆寺金堂四天王像の諸問題」『国宝 法隆寺金堂展』五六―五七頁 朝日新聞社 二〇〇八

㉑ 岡本太郎「邪鬼」『芸術新潮』二二六(六) 七六頁 新潮社 一九七五

【本文中の図版の出典】

1 『原始仏教美術図典』 雄山閣 一九九〇

2 溝口史郎「サンチーのストゥーパ」 鹿島出版会 二〇〇五

3 山田樹人「ガンダーラ美術の見方」 里文出版 一九九九

4 『羣果石窟寺』 平凡社 一九八三

5 『雲崗石窟一』 平凡社 一九八九

6 平山郁夫監修「高句麗壁画古墳」 共同通信社 二〇〇五

7・8・10 春山武松「法隆寺壁画」 一九四七

9・11 久野健「仏像集成6」 学生社 一九九五
12・13 撮影：宮田

補記：本稿は紙幅の都合上、修士論文の前半に当たる「四天王像及びその足下の邪鬼像」に関する部分をほぼ割愛し再構成したものである。

寺社の塔などの軒下を支える邪鬼等の形態比較

北西(西)	北東(北)
南西(南)	南東(東)

№ 1

◎国宝 ○重文 △県指定など

寺社名 創建	所在地	宗派	塔の種類	現在の塔(邪鬼)建立年	邪鬼の居所	各方向の特色(西)(南)	各方向の特色(北)(東)
01 法道寺 天智 9 -670-	大阪・堺	真言	○多宝塔	正平23—1368—	初層	【邪鬼】両手頭支え・尾垂木にイス座り	【邪鬼】両手頭支え・尾垂木にイス座り
						【邪鬼】右手頭支え・左手腿・尾垂木にイス座り	【邪鬼】同上・口左右に2本の牙(上へ)
02 岩船寺 天平 1 -729-	京都・木津川	真言律	○三重塔	嘉吉 2—1442—	各層12体	【全て邪鬼】12体全て赤く塗られ、さらに濃い赤の襷。ほぼ同形で、後頭部から背の位置で支え、両手は膝や腿・視線は前方へ	
03 名草神社 明治 9 -1876-	兵庫・養父	神道	○三重塔	大永 7—1527—	初層に邪鬼、三層に四猿	【力士?】右肩・背で支え、右手を隅木側面に当て左手は膝。尾垂木をまたぎ前屈して左下をにらむ。	【力士?】頭で支えるが、身体は上尾垂木から落ちそう(向かって右)で右手でしがみつ、両足は下尾垂木に乗せる。上裸・下スカート状
						【力士?】後頭部・右肩支え、身体は上尾垂木から落ちそう(向かって左)で左肘でしがみつ、左足を下尾垂木に乗せる。上裸・下スカート状	【力士?】左肩・背で支え、左手を隅木側面に当て、右手は膝。尾垂木をまたぎ前屈して右下をにらむ。
						【思わ猿?】左掌をこめかみ辺に当てる。尾垂木先端に体育座り。向かって左に身体向け。	【思わ猿?】両掌で耳塞ぎ。尾垂木先端に体育座り。
						【兄猿?】両掌で目塞ぎ。尾垂木先端に体育座り。	【兄猿?】右掌で口塞ぎ。尾垂木先端に体育座り。向かって右に身体向け。
04 善峰寺 長元 2 -1029-	京都・西京区	天台	○多宝塔	元和 7—1621—	上層	【力士?】後頭部首支え・右手膝・左手上へ・胡座・視線前へ	【力士?】後頭部首支え・両手膝・胡座・視線前へ
						【力士?】後頭部肩支え・両手膝・両膝立て・視線前へ	【力士?】頭頂部支え・両手上へ・両膝立て・口元笑み?
05 教王護国寺(東寺) 延暦15 -796-	京都・南区	真言	◎五重塔	寛永20—1643—	初層	【力士】右手支え・左拳・左膝立・首左傾・視線前方	【力士】背首支え・両手膝・蹲踞・視線前方直
						【力士】背首支え・右手膝・左手耳・蹲踞・視線右下	【力士】背首支え・右手膝・蹲踞・左手後方直・視線前方直
06 仁和寺 仁和 4 -888-	京都・右京区	真言	○五重塔	寛永21—1644—	初層	【力士】背首支え・右手膝・左手後方直・蹲踞・視線前方	【邪鬼?】他の三体と異質・獅子か・右手肩支え・左手膝
						【力士】右肩背支え・右手支え・左手耳・視線右上	【力士】顔欠損・背肩支え・右手横腹・左手後方直
07 本山寺 天武朝頃	岡山・美咲町	天台	○三重塔	承応 1—1652—	初層	【力士】頭と両手で隅木を支える。正面を直視。尾垂木の奥部に蹲踞。北東とはほぼ同形。	【力士】頭と両手で隅木を支える。正面を直視。尾垂木の奥部に蹲踞。北西とはほぼ同形。
						【力士】頭支え。両肘を横に張り両手は膝。正面直視。尾垂木奥部に蹲踞。	【力士】頭支え。両肘を横に張り両手は膝。正面直視。尾垂木奥部に蹲踞。
08 叡福寺 神亀 1 -724-	大阪・太子町	真言	○多宝塔	承応 1—1652—	上層	【邪鬼】30～40歳代。口をきつく閉じる。	【邪鬼】10～20歳代。口をきつく閉じる。
						【邪鬼】70～80歳代。口半開き。	【邪鬼】50～60歳代。口閉じ。

寺社名 創建	所在地	宗派	塔の種類	現在の塔(邪鬼)建立年	邪鬼の居所	各方向の特色(西)(南)	各方向の特色(北)(東)
09	興願寺 寛永15 -1638-	愛媛・三島 真言	三重塔	貞享1-1684-	初層	【邪鬼】 頭頂部と右手支え・左手膝・顔一部に青・阿形	【邪鬼】 頭頂部支え・両手膝・顔一部に赤・吽形
						【邪鬼】 頭頂部支え・両手膝・翼と顔一部に赤・阿形	【邪鬼】 頭頂部と左手支え・右手膝・顔と胸一部に青・吽形
10	太山寺 霊亀2 -716-	兵庫・神戸	天台 三重塔	貞享5-1688-	各層に12体 大日如来を安置(等身大)・四天王像	【邪鬼】 右頭と右手支え・左手膝・視線右上・胡座	【邪鬼】 左前頭と左手支え・視線左上へ・右手膝・左足立て
						【邪鬼】 左頭と左手支え・右手膝・左足立て・髪右へ直毛	【邪鬼】 左前頭と左手支え・顔不明瞭・右手膝・左足立て
						【邪鬼】 頭と背支え・両手膝・視線前へ強く・両膝立て蹲踞	【邪鬼】 左にほぼ同じ
						【邪鬼】 頭頂部支え・両肘膝につけ掌は耳・視線前・両膝立て蹲踞	【邪鬼】 形は左上に同じ・表情は目大きく三角の歯をむき出し異質
						【邪鬼】 頭部と背支え・両手膝・視線前・両膝立て蹲踞	【邪鬼】 左とほぼ同じ・表情厳しい・顔逆三角
						【邪鬼】 上とほぼ同じ・顔四角	【邪鬼】 左上とほぼ同じ・褐色の色が多く残る
11	法隆寺 7世紀後半 -8世紀初	奈良・斑鳩	聖徳 ◎五重塔	元禄5-1692-	初層と五層	【邪鬼】 頭と肩支え・両手膝・視線前・両膝立て蹲踞・阿形	【邪鬼】 * 南西とほぼ同形
						【邪鬼】 頭頂部と両手支え・視線前・両膝立て蹲踞・吽形	【邪鬼】 * 北西とほぼ同形
						【力士?】 歯をむき出し、喜びの表情。	【力士?】 歯をむき出し、怒りの表情。
						【力士?】 口を閉じ、平静の表情。	【力士?】 口を閉じ、〈楽〉の表情。
12	穴太寺 慶雲2 -705-	京都・亀岡	天台 多宝塔	享保年間	上層	【邪鬼】 完全に右横を向き背で支え両手は下の垂木へ・小太りの猿?	【邪鬼】 上半身をくねり右横向き・右手は前垂らし・左手は後ろ支え・左足は後ろ垂らし
						【邪鬼】 頭と左手支え・視線前	【邪鬼】 頭と両手支え・膝立・視線前
13	大石寺 正応3 -1290-	静岡・富士宮	日蓮正 ○五重塔	寛延2-1749-	初層	【邪鬼か力士】 頭支え・右腕曲げ前へ・左手膝・右足胡座・左足立て・口開	【邪鬼か力士】 頭支え・両手膝右足立て・左足胡座・歯縛
						【邪鬼か力士】 頭支え・右腕曲げ下へ・左手手へ・右足胡座・左足立て・口開	【邪鬼か力士】 * 北東とほぼ同形
14	道成寺 大宝1 -701-	和歌山・日高川	天台 三重塔	宝暦12-1762-	初層と三層	【力士】 頭と左手支え・右手膝・蹲踞・口閉	【力士】 頭と右手支え・左手膝・蹲踞・口閉
						【力士】 頭支え・両手膝・蹲踞・口閉	【力士】 * 初層南西とほぼ同形
						【力士】 頭支え・両手膝・蹲踞・口開	【力士】 * 三層南西とほぼ同形
						【力士】 頭支え・両手膝・蹲踞・口開	【力士】 * 三層南西とほぼ同形

No. 3

	寺社名 創建	所在地	宗派	塔の種類	現在の塔(邪鬼)建立年	邪鬼の居所	各方向の特色(西)(南)	各方向の特色(北)(東)
15	千光寺 (淡路島 洲本) 延喜1 -901-	兵庫・洲本	真言	三重塔	文化10—1813—	初層と二層	【力士】 右手肘支え・左手膝・蹲踞・左斜め前に身体を向け、表情が秀逸(案々・飄々)	【獅子】 頭支え・顔面と腹部欠損・正面向き
		大日如来のほか五智如来を祀る					【力士】 背と両手支え・蹲踞・正面向き	【獅子】 頭支え・顔面のみ右斜め前向き
		初層・二層とも塔の前面である北西・南西隅に力士、後面である北東・南東隅に獅子(?)。三層は尾垂木の上に龍。力士の出腹と口閉じは共通。二層の力士の方が初層力士より古い。					【力士】 両肘支え・両手膝・蹲踞・顔のみ左斜め前向き	【獅子】 頭支え・正面向き
							【力士】 両肘と背支え・両手膝・やや左前向き	【獅子】 *二層北東とほぼ同形
16	柏原八幡 神社	兵庫・丹波	神道	△三重塔	文化10—1813—	初層	【力士】 首を左に傾け後頭部で支え。両手と左足は垂木上に、右足は側面に。口開け、長髪。	【力士】 両手と頭頂部で支え、正対蹲踞の形。口閉じ、緑パンツ。
		4体とも他寺のものに比し、マンガ的像容。近年の彩色で色鮮やか。手足首に黄色のリストバンド、緑や空色のパンツをはく。動きは様々だが太い肩や目を見開くなどが共通点。4体の座る尾垂木の下に龍の像有り。					【力士】 首を左にかしげ後頭部と右手で支え。左手は前方に出す。口閉じ、緑パンツ。	【力士】 首を右に曲げ、左手と後頭部で支え。半圓の右膝に右手。口開き、白鉢巻と空色パンツ。
17	阿波鶴林寺 延暦17 -798-	徳島・勝浦町	真言	△三重塔	文政10—1827—	初層	【邪鬼】 頭支え・膝立てで両手で抱える。手足指5本明瞭。	【邪鬼】 頭と両手支え・両膝立て
		金剛界大日如来のほか五智如来(大日だけ大きい・全て正面向き) 塔自体に装飾彫刻がとても多い。邪鬼4体の意匠は同じ。正面向き・頭髪オールバック。邪鬼が猿か。樺。					【邪鬼】 頭と左手支え・両膝立て・右手膝	【邪鬼】 頭と右手支え・両膝立て
18	龍原寺 慶長6 -1601-	大分・臼杵	浄土	三重塔	安政5—1858—	初層	【邪鬼】 背と両手支え・両膝半立て・下向き疲労感・口開き	【邪鬼】 右手肘支え・左手膝・両足合わせ・正面向き
		聖徳太子を祀る・「太子塔」とよぶ。 高橋団内の設計、弟子の坂本莊右衛門により建立。(総高21.8m)邪鬼4体とも角を2本はやす。胴体は細身。蝶結びの下帯。					【邪鬼】 背と右手支え・左手膝・両足裏合わせ・下向き	【邪鬼】 背と両手支え・両膝半立て・下向き・口開き
19	蓮光寺 (淡路島 洲本)	兵庫・洲本	真言	二重塔	明和8—1771—	初層と二層	【力士】 右手肘支え・両膝立て座り・頭部を左へずらし正面直視	【力士】 *初層北西とほぼ同形
		聖徳太子像(16歳)・四天王像			洲本龍宝院(廃寺)から移築(明治5)		【力士】 頭支え・両手膝・両膝立座り・正面直視	【力士】 右肘と肘支え・左手膝・上半身左へ傾け・正面直視
		初層の4体は細かな彫りの龍の頭に乗り、同じ意匠。上層の4体のうち南西・南東は同じ意匠だが初層とは異なり、北西は異質で、北東は獅子か？					【邪鬼】 後頭部と背支え・上半身を前へ屈曲・下向き	【獅子?】 腹ばいで尾垂木を抱え、背で支え・身体は左へ半身
		塔の正面に塔破風の向拝あり。向拝の柱を石造の亀の背が支える。多宝塔と異なり上層に亀腹なく方形。高さ約12m。					【邪鬼】 右肘と肘支え・膝立座り・頭を左へずらし左方を見・口開	【邪鬼】 頭と両肘支え・両手膝・両膝立て座り・正面直視・口閉

【塔以外の仏閣】

	寺社名 創建	所在地	宗派	仏閣の種類	現在の塔(邪鬼)建立年	邪鬼の居所	各方向の特色(西)(南)	各方向の特色(北)(東)
20	唐招提寺 天平宝字3 -759-	奈良・奈良	律	◎金堂	8世紀後半	金堂軒下四隅	【神王?】 頭・両肘支え。尾垂木に正座し両手は腿。歯をむき出し威嚇の表情。	【神王?】 北西とほぼ同形・同表情。
		4体のうち南西邪鬼は元禄期のものだが、他の3体は奈良期のものと推定されている。現存最古と思われる。南西以外の3体はほぼ同形・同表情。					【神王?】 頭・両肘支え。尾垂木に正座し両手は腿。惜けなさげな表情。この一体は元禄期。	【神王?】 北西とほぼ同形・同表情。
21	滝山寺 伝天武朝	愛知・岡崎	天台	○三門	文永4—1267—	三門軒下	【邪鬼】 頭と両手支え・三ツ目(額)・上半身を深く屈曲・全身薄青	【邪鬼】 背と右手支え・三ツ目(横並び・中央眼を共有)・牙4本・全身緑
		三門(山門・仁王門)の邪鬼はここのみ。他寺の邪鬼と比べ異様な印象(南東を除く)。4体の意匠は同じなのだろうが、掴みにくい。目はギョロリとした玉眼。寺は奈良期に役行者が創始と伝える。正月の鬼祭りが有名。					【邪鬼】 頭支え・顔二つで左右を向く・両方に2本の牙・全身緑	【邪鬼】 頭と背と右手支え・左手下へ・正面直視・正座し身体前へ・全身薄青

寺社名 創建	所在地	宗派	仏閣の種類	現在の塔(邪鬼)建立年	邪鬼の居所	各方向の特色(西)(南)	各方向の特色(北)(東)
22 専称寺 慶長元 -1596-	山形・山形	浄土真	本堂	元禄17—1703—	本堂の軒四隅	【力士】背頭支え・正面向き蹲踞・正面向き両手前へ・歯をむき出し威嚇	【力士】左手頭支え・左膝付き正面向き蹲踞・右手前で垂木に着く・前方凝視
	本堂は元禄16(1703)に改築。四隅の力士は「夜鳴力士」とよばれ、左甚五郎作とされる。大きな本堂に負けぬほど大きな力士像。姿勢の変化や表情の差違がおもしろい。					【力士】背肩支え・右膝付き蹲踞・右手前で垂木に着く・左手膝・左方に顔向け開口威嚇	【力士】左肩背支え・右斜め向きの半身姿勢・左足曲げ前へ・右足後ろ・両手も前後へ・正面凝視
23 専修寺 文明年間 1469-1487	三重・津	浄土真	唐門	天保15—1844—	唐門軒下・梁支え	【邪鬼】南西面西側：背肩支え・右手膝・左手曲げて胸・胡座・視線左下	【邪鬼】北東面北側：両手支え・左膝立て・視線右上
	唐門の正面と後ろ正面の梁を中央付近で2体ずつで支える。4体意匠は同じで目はギョロリ(玉眼か)。					【邪鬼】南西面南側：両手支え・胡座・視線左上	【邪鬼】北東面東側：左手支え・右手下へ・右足前へ・視線左遠方
24 書写山 圓教寺 康保3 -966-	兵庫・姫路	天台	奥の院開山堂	堂の軒下3隅(除北西)		重さに耐えかねて逃げ出した伝説あり。	【力士】首・背で支え。膝立座り、右手は膝。歯をむき耐える。
	開山の性空上人を祀る。						【力士】首・背で支え。膝立座り、左手は膝。口を堅く閉じ耐える。
25 日光山 輪王寺 天平神護2 -766-	栃木・日光	天台	常行堂	元和5—1619—	常行堂の軒下4隅	【力士】*開山堂修復中のため不明。	【力士】首・背で支え。膝立座り、左手は膝。口を堅く閉じ耐える。
	4体とも目が大きく耳を立て、足指3本で明らかに邪鬼の形象。また正面を直視し両足を尾垂木側面に垂らし、両手は腿に当てるなど同形体。違いは口の開閉等の表情と装飾物。					【邪鬼】頭支え。口閉じ。	【邪鬼】頭支え。口開け威嚇。
26 願成院 寛永12 -1635-	大分・竹田	真言	愛染堂○	寛永12—1635—	愛染堂の軒下4隅	【邪鬼】頭支え。口開け。	【邪鬼】頭支え。口閉じ。
	大日如来を本尊にし、虚空蔵菩薩・愛染明王など計7体					【邪鬼】潰れて平行な頭頂部支え・太く短い足で胡座・右手右足先・左手左膝・右斜め下注視	【邪鬼】前屈し背と後頭部右手支え・左足胡座右足後方ではねる・左手前方垂木に着く・開口し右下へ視線
27 勝興寺 文明3 -1471-	富山・高岡	浄土真	本堂	寛政5—1793—	本堂の軒下4隅	【邪鬼】頭頂部両肩支え・左膝立て右胡座・左手後方へ右手右膝・大きく開口し正面向き・顔に星形	【邪鬼】前屈し背と後頭部両肩支え・左膝立て左手当て・右足後方ではねるも膝側部へ・視線は自身の乗る垂木へ
	左甚五郎作と伝わる。4体とも創建当時から。北西・南西の「静」に対し、北東・南東像は共に右足を後方で跳ね上げる様な「動」の姿勢。					【邪鬼】後頭部と右手支え。膝立座り。顔は無表情で、丸い目でじっと前を凝視。	【邪鬼】頭と両手で支え、足は胡座か。顔にすこしゆがみあり。顔は南西に似る。前下を凝視。
28 久米寺 奈良時代 前期か	奈良・橿原	真言	本堂	不明	本堂正面の梁下6体	【邪鬼】頭と右手で支え、左手は膝。右足は膝立、左は胡座。無表情で前を凝視。	【邪鬼】頭と両手で支え、足は両膝立て。顔は北西に似る。前下を凝視。
	薬師瑠璃光如来(木造座像)					*西側左*【邪鬼】顔を横にし、右側面で支える。右膝立て左手は腿?口を大きく開け苦悶の表情。	*東側右*【邪鬼】頭支え。蹲踞し両手は膝。口を固く結び、前を凝視。
	屋根の尾垂木で隅木を支えるのではなく、本堂正面の外陣の梁を6体で支える。下の梁に乗り、上の梁を支える。内陣から後背部も見える。本堂向拝の柱を支える石製の立法形の水盤が左右に2つあり、それを4体ずつの力士が支える。					*西側右*【邪鬼】頭支え。蹲踞し両手は膝。口を開き高笑いの表情。	*東側左*【邪鬼】頭と両手で支え、蹲踞の形。口を固く結び、前を凝視。表情は東右に似る。
						中央左【邪鬼】頭と左手で支え、左膝立て右手は腿。口を閉じ顔は斜めで左上を凝視。	*中央右*【邪鬼】頭支え。蹲踞し両手は膝。口を開き前を凝視し威嚇の表情。

写真資料

※【岩船寺旧像】は『史跡と美術』641より。他は宮田の撮影です。



法道寺多宝塔 東



法道寺多宝塔 西 遠景



岩船寺旧像



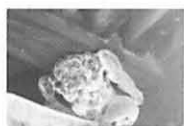
岩船寺三重塔現像



名草神社三重塔初層 南



善峯寺多宝塔 南東



東寺五重塔 南東



同左 南西



仁和寺五重塔 北西



本山寺三重塔 北西



叡福寺多宝塔 北東



同左 南東



興願寺三重塔 南



太山寺三重塔初層 西



同左 二層 西



法隆寺五重塔初層 北東



同左五層 南東



穴太寺多宝塔 北東



大石寺五重塔 北西



道成寺三重塔初層南東



道成寺三層 南西



千光寺三重塔初層 北西



同左初層 南西



同左初層 南東獅子



柏原八幡神社三重塔 南東



鶴林寺三重塔 北西



龍原寺三重塔 東



同左 西



蓮光寺二重塔初層 北東



同左上層 南東



滝山寺三門 南西



同左 北東



専称寺金堂 南西



専修寺唐門 南西面西側



圓教寺開山堂 北東



輪王寺常行堂 北



願成院愛染堂 北東



勝興寺本堂 北東



久米寺本堂 西側左



同左 西側右